

第7章 観光まちづくり東大方式の追求

センター機能のプロジェクト新設

都市デザイン研究室は、広く社会や地域に開かれ、情報や研究の蓄積を通してまちづくりを支援するデザインセンターとしての役割を持つことを目指しています。特に、「公共的空間」(市民が共有しうる物理的空間、市民が自由な活動を行いうる社会的空間)の研究と実現の手法が課題と考えています。研究活動は、所属メンバーによる研究蓄積を始め、地域との連携による調査研究や提案、自治体やまちづくり組織・企業との協働による計画・デザイン、またこれらの成果を論説やコンペなどを通じた社会的発言と幅広いものとなっています。(都市デザイン研究室ホームページ「研究室の紹介」)



観光まちづくり東大方式への牽引(出典:『大井川鉄道オフィシャルガイド』から千頭駅構内)

大学入試に『観光まちづくり』

都市デザイン研究室と先端研の西村メッセージには、「まちづくり」の用語はあっても、まだ、「観光まちづくり」の語はない。事例を蓄積しながら、織り込む機の熟するのを待っている配慮とみられる。西村の主著『都市保全計画』にも「観光まちづくり」の語は出ていない。『都市デザイン研マガジン』にも「観光まちづくり」という用語の登場は少ない。『観光まちづくり』の表紙がマガジンに載ったのは、2010年6月10日付の124号になってからで、まちづくりプロジェクト元年から10周年に当たる2010年は、それなりの検証特集があってもよい。

しかし、研究室の教官陣が「観光まちづくり」の論陣を張った『観光まちづくり』が刊行されたことは、研究室が大きなテーマとして掲げたことと、社会的に受け取られている。その上梓の翌年にして迎えた「まちづくりプロジェクト10周年」を機に、研究室として、名称はともあれ、「観光まちづくりプロジェクト」をつくり、各まちづくりプロジェクトの情報集収集とケアに当たることを提案したい。もちろん学生による運営である。そして、ワークショップ、フォーラム、シンポジウムを開いて英知を集め、「観光まちづくり東大方式」を討議してほしい。

毎年4月にまちづくりプロジェクト活動報告会が、内部イベントとして行われ、その発表事例が研究室のホームページ「プロジェクト」の内容になって更新されている。こうしたシステムを含めたシステムをレベルアップし、新設の「観光まちづくりプロジェクト」が中心になって、「東大方式」を打ち出すことはどうだろうか。

知の東大、東大生、研究室の権威が広く認知され、熟成したコンペ力のある研究室の伝統を活か

して、「観光まちづくり東大方式」の設計が待たれるのである。10周年の総括については、「まちづくりプロジェクト総覧」ともいべき本稿掲載の『都市デザイン研マガジン』の悉皆調査結果が、かなり役立つことと思われる。

この場合の「東大方式」は、正しくは「観光まちづくり東大プロジェクト方式」である。観光まちづくりと一般的にいう場合は、地域も広範囲で現下の観光産業のコンセプトを想起するが、都市デザイン研究室策定ともなれば、この「東大方式」は、ここ10年間展開してきたまちづくりプロジェクトシステムを活かした「観光まちづくり方式」となる。

観光業界においても、この「プロジェクト方式」は新風であろう。東大プロジェクト観光まちづくり基地の単独または周遊ツアーが実現して、ツアコン学生がみずから案内する。東大方式観光まちづくりの真髄を問うのであれば、ツアーの企画から参画し、彗星のような「東大ニューツーリズム」を育てていくことである。

まちづくりプロジェクト学生が、ツアコン資格を取得することによるメリットは、想像以上に多いと考えられる。2009年度鞆の浦プロジェクトに、「観光班」が誕生している現象を一步進めるのである。国内の旅はまちづくりプロジェクトでせわいなく体験し、隔年の海外研究室旅行は壮大なスケールでツーリズムを満喫する。これらのツアーを通じてツアコンにも関心を抱き、研究室のまちづくりプロジェクトシステムに導入することは、観光まちづくり時代に戦力となる。

次は『観光まちづくり』の表紙が載った『都市デザイン研マガジン』114号(2010.1.10)の記事である。

H22年度入試でまちづくりに注目!

Entering exam in H22 focus on machi-dukuri!



今年度の大学入試で「まちづくり」に関する問題が出題されました。和歌山大学観光学部の小論文試験では西村幸夫編著「観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント」の2章2節(野原先生の文章)が問題文に、名古屋市立大学芸術工学部建築都市デザイン学科の小論文試験では鞆の浦裁判が題材に採り上げられました。(abe)

文学ものの活用

ところで、私は観光まちづくりには、文学ものの活用も必要と考え、一例として旅情ミステリーに描かれたその土地の描写を読みながら、旅に出ている。

本書で取り上げたのは、内田康夫の『風の盆幻想』『鞆の浦殺人事件』、西村京太郎の『越中おわら風の盆殺人事件』、和久峻三の『風の殺意・おわら風の盆』、木谷恭介の『飛騨高山殺人事件』、内田康夫の『横浜の風殺人事件』のほか、佐原が登場している菊村到の『あやめ祭殺人景色』、前述の大井川鉄道SLツアーの家山が登場する木谷恭介の『大井川SL殺人事件』、喜多方周辺の様子を描いた金久保茂樹の『奥会津隠れ里伝説殺人事件』、新宿の様相が参考になる南秀男の『新宿殺人遊戯』、私のツアコン実務研修コースに役立った西村京太郎の『東京湾アクアライン十五・一キロの罟』であるが、いずれもまちづくりそのものは描かれていない。

今後は、ミステリーのうちでも旅情ものは、まちづくりの視野で書かれた作品が出てほしいし、まして東大まちづくりプロジェクト方式が描かれれば、社会的影響は少なくないであろう。都市デザイン研究室側は、推理作家のみならず、知られた作家やエッセイスト、ジャーナリスト、画家などを東大プロジェクトへ招いて、取材させてほしいものである。

ミステリーと概念規定については、たとえば、有栖川有栖の『山伏地蔵坊』(創元社文庫、2002年)巻末の戸川安宣解説では、次のように概念規定のまとめに力を入れている。

ここで概念規定を纏めてみよう。「安楽椅子探偵」とは、まず 探偵役が一切捜査に関する行動を起こさず、報告書の話の聞いたり新聞その他の書類に目を通して得た材料だけを基に、推理し、真相を言い当てる。以上の条件に当てはまる作品が、シリーズの大半を占める場合、その探偵を「安楽椅子探偵」と称する。(pp.355～356)

フィールドを軸とする東大まちづくりプロジェクトは、「安楽椅子探偵」になり得ないが、さりとて物事概念規定化、理論化は自家矢筈籠中の東大だけに、東大まちづくり概念規定と理論構築は、広く社会を納得させることになる。

融合定義

西村は、『観光まちづくり』でかなりの解釈や概念構成を提示したが、まちづくり側と観光側双方が共通で実践的に用いることができる融合定義の決定打は、どこを引用すればいいのだろうか。定義は、立場によって異なることが多く、双方を融合した定義は、中立公正な学者としての西村以外に書ける人はいない。

たとえば、ある旅行社の「観光のまちづくりを基点とした観光振興事業」の資料には、「地域に点在する観光資源を有機的に結び付け、観光の視点に立ったまちづくりを行う事業である。観光のまちづくりのテーマの抽出は、これまで観光資源として認識されていなかったごく日常的な事柄や、観光とは無縁と考えられてきた事柄まで、すべてを見直し、再評価するところからはじまる。他の地域では決して見ることのできない地域ならではのモノやことを再発見し、それらを有機的に結び付けることにより、地域が誇れるあらたな観光資源として展開を図る」とある。

すさまじいエネルギーで、根こそぎ観光化しようという感じである。まちづくり側からの代案が出されないと、観光まちづくりの定義もこの趣旨と勢いで通ってしまう。同じ観光まちづくりといっても、まちづくり活動側から定義すれば、異なったものになる。それを止揚するのが西村幸夫であり、それを支えるのがまちづくりプロジェクトである。

ミステリーの巻末解説といえ、次のような至言に出会うこともある。歴史を重んじる「まちづくりプロジェクト」についての箴言とも受け取れる。長井彬が『函館五稜郭の闇』(講談社、1968年)の著者のことばで、「訪れた場所には歴史の影が落ちていてこそ旅情がかき立てられるのではないか」と書いて評判になったことがある。

ところで「デザ研」という略称は、作家ならずとも、多くの人は疑問に思うであろう。権威ある研究室にしては、内容が類推できないだけでなく品位がない語である。無理をしてもフルネームか、せめて「デザ」は「デザイン」としてほしい。

ここで、2004年刊行の西村の大著『都市保全計画』における観光についての記述をみておこう。そこにはまだ「観光まちづくり」の用語は出ていないが、下地を知ることができる。

歴史的な都市や地区はまた、貴重な観光資源として地域経済に貢献することができる、いわゆる文化観光 cultural tourism をすすめる産業セクターは、21世紀の最大の成長産業のひとつとして期待されている。

一方、観光は皮相的な地域理解や安易な地区の売り出しを誘発する危険性をも孕んでいる。観光の持つ可能性と危険性をともに認識する必要がある。

観光をたんに結果としてのみとらえるのではなく、駐車場や適切なアメニティ案内サイン、飲

食施設などの来訪者関連施設の計画をあらかじめ立案しておくことは必要でもある。特にその都市や地区を対外的にガイダンスし、都市の歴史や構造をよりよく理解してもらうための用意は周到におこなうべきである。こうしたガイダンスや地域理解のための各種表示は地域住民のためにもなる。他方、来訪者のための施設と地域住民のための施設との共存や棲み分けが工夫される必要がある。(pp.23~24)

都市保全によって来訪者が増加することが予想される場合には、それによって生活者の環境が過度に変容することのないように、また都市全体が過度の観光依存に陥ることのないように監視する必要がある。来訪者への適切な対応を計画に織り込むことによって観光による負のインパクトを抑え、都市をサステイナブルに保つことが課題となる。(p.39)

観光まちづくりはアメニティ

本稿執筆にあたり、観光関係の図書に「観光まちづくり」の記述を追ったところ、次のようにいくつかの簡単な概念規定がみられた。こうした規定は冠を変えればどこにも通用しそうなものである。たとえば、大きな成果を上げた1984年度から3年間の環境庁のアメニティ・タウン計画(快適環境整備事業)のキーワード「アメニティ」を「観光まちづくり」と言い換えれば通用しそうである。観光まちづくりはアメニティであるから、その互換性は高く当然であるが、その他にも通じる汎用性がある。

観光からのまちづくりは、外国人 tourist のためだけでなく、住民の精神的な豊かさの形成においても重要な役割を果たすものであるといえる。そのため、近年においては観光研究が単なる国際観光対応のための観光論や観光の現象分析から、実際の観光まちづくりに関心を移すことが緊急の課題になっていることを認識したい。(2001年12月8日、観光まちづくり学会創立総会における初代会長安藤昭岩手大学教授メッセージ)

私が会長を務めていた政府の観光政策審議会(当時)で委員としてご活躍いただいた東京大学教授の西村幸夫先生も、「近年、観光で成功している街を考えると、自分たちの生活環境が良くなるように努力している所が結果的に魅力を増している。自分たちが住みやすいと思わないような所には人も魅力も感じない。観光と街づくりの一体化、つまり『観光まちづくり』という新しい考え方が重要である」といった趣旨のことを主張しておられる。(大西正文)『観光の時代』p.94。

こうした観光まちづくり学会・研究会や観光関係本に散見される事象が増え、「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業など、地域のあらゆる資源を生かすことによって、交流を振興し、活力あふれる町を実現するための活動」とか、「観光まちづくりとは、一言で言うと、地域が主体となって、住む人が誇れ、旅行者が何度でも訪れたい活力のあるまちづくりのこと」といったコメントがみられるようになった。

「観光まちづくり」が知られるにつれ、観光まちづくりを冠した本が少しずつ増えてきている。観光まちづくりとうたうことは、それだけその意識があるから一応は歓迎したいのであるが、迎合して、たまたま表紙を観光まちづくりにすげかえた程度の市販本つづきである。

たとえば、戸所隆『日常空間を活かした観光まちづくりは』という魅力的な表題の本をみても、「観光地づくりとリゾート地づくり、一般的なまちづくりを包括する意味で「観光まちづくり」を用いる」と「はじめ」に宣しているように、定義も深みもない。「観光まちづくり」のタイトルは

出版社がつけたのであろうか。と、行政の「いきいき観光まちづくり」的表現も深みがない。それを深化させるのが東大都市デザイン研究室のプロジェクトではなかろうか。ここで、「観光まちづくり東大プロジェクト方式（略して東大方式）への提案」をまとめておきたい。

自主性の東大のプロジェクトであるから、一概に観光まちづくりを掲げることは難しいが、それをひとつの実験として懲憑することは、指向性による成果が生まれよう。10指を超えるプロジェクトのうちには、観光まちづくりには向かないところもある。

そこで考えられるのは、ひとつでもふたつでも、観光まちづくりの実験ができる地域を選んで、それをめざすプロジェクトを決めることである。

天下切っけの頭脳集団であるから、いざ観光まちづくりの実験となれば、おのずからそれになかった調査、イベント、立論などがなされる。学生だけでなく、教官も加わっているため、概念規定ひいては説得性のある理論が構築され、修士論文や博士論文に成果が現れる可能性が強まる。一方、その間も西村幸夫自身の理論は進展をつづけ、あいまって都市デザイン研究室のこの面における評価は高まると考えられる。

それらの諸相を『都市デザイン研マガジン』によって、世界に発信していくことで、わが国の観光業界も理解を深め、観光まちづくりによる交流を広げていくことができよう。その際、東大方式が生まれていけば、具体的にそのプロジェクトと協働して、観光まちづくりの社会化への力になる。

東大生というフレッシュな知性が生み出す観光まちづくりをうたうことは、観光業界にとっては魅力であり、まちづくり側にとっても、質の向上を図りつつ協力していきたくなる。東大プロジェクト側は、教育研究活動の一環として行い、いったんその気になれば、成果物にみるべきものがあることは、他の研究分野についての実績が物語っている。

問題は観光産業側のビヘイビアである。既存の手法を打破して、この東大プロジェクトとの交流から、「観光まちづくり観光」を展開していく可能性はどうであろうか。「観光まちづくり」の語では、循環が表出されないので、「まちづくり観光」といった言い方と合わせて、「観光まちづくり観光」と仮にしたのである。

地元の要望は、一過性の観光でなく、その地域のまちづくりにこころを動かされた観光客によるリピート、さらに人口減少地域への定住ではなかろうか。観光産業側は、これまでなかったまちづくりの研修をツアーコン研修に課すことから始め、東大プロジェクト見学研修を企画してはどうだろうか。

東大生ツアーコンの配置

東大プロジェクト側としては、今後はまちづくりプロジェクトメンバーに学生ツアーコンが生まれれば、地元と観光産業側に対して、「東大まちづくりツアー」の道を開拓できる。西村は業界の上層部に影響力がある。学生は学生の特権で、業界のどの層にもアタックできるし、とくに現場第一線のツアー乗務員と協働することはたやすい。ただし、ツアーコンは一例であって、その他の方法を工夫して活用する発想も大切である。

学生旅程管理主任者（ツアーコンダクター）を私が提案したのは、自分が資格者になってみて、東大まちづくりプロジェクトと観光まちづくりの連動がみえてきたからである。研究室で資格取得の雰囲気をつくり、取得学生が観光産業との間をつなぎ、旅行社側を案内することや、さらには観光客の現地案内およびいろいろなイベント開催などで、評価されることになる。影響は、発想次第で広がるのである。

ことに研究室にはアジア諸国からの留学生が多く、その留学生が同国人を誘って訪問することで、各国語の通訳もできる。そうしたことを総合して、東大学生ツアコンは、観光まちづくりの理論と実践のデータを研究室に蓄積することができる。

2010年7月1日は、中国人観光客へのビザ発給が中間所得層にまで緩和され、その観光来日人数はかなり大きく増える見通しとなった。研究室の中国人留学生がツアコン資格を得ることは、さらに効用があろう。私がツアコン実務研修で情熱的な受講生に感心したのが、中国人の千葉大大学院修士課程の女性だった。それも理系である。海外からの観光客数で多いのは、韓国からであるが、研究室には韓国人留学生がいることで、東大方式のツアコンはメリットがある。

「東大生ツアコンのツアー」「東大生ツアコンとともに」「東大方式のツアコンツアー」「東大学生企画のフレッシュツアー」など、アトラクティブなイメージが湧き出てくる。自分が関わったことのない地域へのツアーではなく、みずからまちづくりに加わっている地域への若い感性による案内であるから、訪問者に魅力を与えるツアーとなる。

幸い旅程管理主任者の資格取得は、国家試験ではなくて国家認定なので、観光庁登録機関における学科・実務合わせて数日の研修・テストとわずかの費用ですむ。旅程管理主任者には、「国内」と「総合」がある。国内は国内専科、総合は国内と海外合わせての専科である。私は年齢を考えて「国内」にしたが、もちろん学生には総合を勧めたい。国内、海外ともに乗務できる「総合ツアコンのいる東大まちづくりプロジェクト」である。

ツアコンの本務は添乗である。それならば、なぜ東大まちづくりプロジェクトにとって効用があるのかと問われよう。しかし、ツアコン資格者になることで、実際の乗務の有無にかかわらず、観光業界の構成員として、それぞれが東大プロジェクトと観光業界の結節点のとなる。東大プロジェクト側が「まちづくり」といっても、研究者集団だけでは、観光問題は進展しない。

まちづくりプロジェクトメンバーがツアコンになることで、観光業界への足がかりと発言力が生まれ、疎通が促進される。観光側が東大生になって、まちづくりプロジェクトのメンバーになることはまず考えられないから、東大ツアコンは貴重である。

また東大ツアコン有資格学生は、プロジェクト活動で、調査からさまざまなイベントをこなしているのので、どのようにも観光まちづくりを広く啓蒙できる可能性がある。

ところで、十指に余るまちづくりプロジェクトの多くが、観光まちづくりに合いそうである。そのうち佐原や鞆の浦が最もふさわしく思われる。『都市デザイン研マガジン』で、プロジェクト活動を悉皆調査したが、個々のモノというより、「ぐるぎ+」というロゴに強く惹き込まれた。「ぐる」という語で、巡り、循環、周遊のツーリズムのイメージをかきたてられた。「+」を「ぶらす」とひらがなで読ませるセンスにも惹かれた。

佐原プロジェクトは、回遊性をいちばんのターゲットに据えている。「ぐるぎ」は、学生で古着店を一時期開店する異色実験のロゴであるが、「ぐるぎ」だけでは分かりにくいので、「ぐるぎ何とか」とつける妙案はないものだろうか。「ぐるぎ」に誘発されて、「ぐるりーと」(東大ツーリズムの意)が浮んだ。コンペで入賞を重ねている都市デザイン研究室としては、キャッチフレーズもコンセプトもお手のものであり、コピーライトなみの創造が期待されるのである。

東大観光まちづくりポスター

佐原プロジェクトについては、まずは「ぐるぎ+」の含蓄に惹きつけられたと述べたが、いまひとつ、すでに2回誌面に登場していた、実行メンバー浴衣姿の「夕涼みイベント」スナップ写真で

ある。そのフォトは、観光ポスターとして通用するできればである。佐原プロジェクトの立役者である博士課程のタイ人留学生ナッタポンも、浴衣がよく似合っている。

佐原プロジェクトは、駅舎改装のデザイン公募に応募して入選している。そのときの添付資料のうち、ひとびとが明るくのびやかに中庭をクロスして歩むイラストに、吸い込まれた。このタッチが佐原プロジェクトのキャラクターであると感じ、そのプロジェクトのまちで、学生ツアコンが活躍している様を思い浮かべた。

画像といえば、理系の設計図面などは、磨き上げられた高度の手法を駆使していて、その道の向きには評価されるが、まちづくりプロジェクトが現地で開く一般住民向け展覧会、展示会のパネル、配布チラシなどが同じ手法で作られていることが多いため、スタティックで住民にとってインパクトが弱い。内容が飛び出してこない、まちづくりの刺激になりにくい。

いかにも工学系といった優等図面より、手書きの温かい図を住民は求めるのである。本稿の初めに大井川鉄道 SL ツアーの記述中に掲載した「家山周辺ご案内マップ」はその好例である。とくによくないのは、案内図がすべて直角街路図に省略された地図で、これが載っている場合は、探し回るには 30 分は余裕をみていかなければならないといわれる。斜めや曲がり道まで、よく分かる目標とともに書き込まれている暖かい手書き地図が、観光まちづくりでは必要である。近道記入もありがたい。

われらがプロジェクトのまちづくり地域へ、研究室の各留学生が母国人を引き連れて訪問し、同僚である学生ツアコンが案内と通訳をすることで、観光まちづくりにインパクトを与えることは、他のプロジェクトへの刺激にもなる。この学生ツアコンは、旅行社のツアーを案内し、観光産業の第一線従事者とだけでなく、本社に招かれて観光まちづくりへのイノベーションを進言することもできる。観光関係の国家資格である通訳ガイド資格を、東大ツアコンが合わせて取得しておくことも勧めたい。

佐原の次の候補は、世界遺産登録への評価が高い鞆の浦プロジェクトである。埋め立て架橋計画が、裁判で差し止められている鞆の浦は、私もプロジェクト合宿に参加したことがあり、学生ツアコンに活躍してほしいところである。その他、喜多方にしても高山、浅草にしても魅力的な候補地である。

それにしても「観光まちづくり」は、「観光によるまちづくり」と「観光のためのまちづくり」を意味しようが、「まちづくりが生む観光」「観光を生むまちづくり」の意味の「まちづくり観光」を内包しているはずである。それらを包括した明晰な用語はないのであろうか。といて、せっかく定着してきた「観光まちづくり」という語に代えるのは、もはや現実的ではない。

中島の横浜国大と慶応大転出にともなう、その後のまちづくりプロジェクトは、窪田亜矢を軸に、助教阿部大輔（都市持続再生センター）らが加わった布陣が、気鋭の院生らとともに、新年度の活動を活発に展開している。

「現場にこそ現実と真実が存する」東大方式案 30 ポイント

次は、東大観光まちづくりプロジェクト方式提案 30 ポイントである。（順不同）

モットーは「現場こそ現実と真実が存する」である。

共通の第一は「回遊性」である。

東大方式で「観光まちづくりツーリズム」の理論化と実践活動。

10 年の蓄積のあるまちづくりプロジェクトのノウハウの総合活用。

まちづくりプロジェクト基地は、観光まちづくり実験拠点を兼ねる。

各まちづくりプロジェクトをたばねる常設の組織をつくる。例 まちづくりプロジェクト委員会。

毎年4月のまちづくりプロジェクト発表会を上記組織の主催として充実させ、公開する。

まちづくりプロジェクトについての会報を発行する。

観光まちづくりの概念構成・理論化を進め、論文化を促進する。

「観光まちづくり」と「東大まちづくりプロジェクト方式」の定義や構想のコンクールを行う。

文理融合を深め、融合魅力の観光まちづくりをめざす。

観光業界に橋を架ける。

世界遺産意識を念頭におく。

東大方式についてシンポジウム、フォーラム、セミナー、講座、講演会、スクールなど開催する。

お祭りは共通項であるので、東大方式からの祝祭振興を考える。

これはという実験や着想は全プロジェクトが支援する。

各まちづくりプロジェクトに、学生ツアコンその他を配置し効用と特色を出す。

ツアコンは東大基地ツアーを観光業界にアピールし、実現の場合は添乗、案内役も務める。

ツアコン以外の資格も東大生レベルであれば、どれでも取得は容易であり、その活用を図る。

空き家活用は共通項であり、社会的テーマとして社会にPRする。

通訳ガイドの資格者が、外国人留学生を積極的に東大基地へ誘う。

ツアーは、まちづくりプロジェクト基地周遊だけでなく、他のまちとの周遊も考える。

東大方式の図書を刊行する。

東大基地へ知られた作家、画家、ジャーナリストなどを招いて、作品その他に書いてもらう。

東大方式PRのため、マスコミ、テレビ、映画のメディアを活用する。

各プロジェクトで磨いてきた経験を活かし、空き家活用、博覧会、展示会、実験店舗、シンポジウム、コンサルタントなどを観光側とコラボ企画する。

子らとのイベントは未来を創る確かな活動で、こども路線を強化する。

第二の故郷意識を高める。

パネル画像、地図など、市民に魅力のある温かい図法を工夫する。

研究室旅行した都市をはじめ、海外において観光まちづくり東大方式を試みる。